

小説の一言語使用問題 ——中西伊之助から金石範まで——

西 成彦

【まえがき】

私が「小説の一言語使用」という問題を考えるようになったきっかけは、『シリーズ言語態⑥ 間文化の言語態』（東京大学出版会、2002）に寄稿を求められて書いたアイザック・バシェヴィス・シンガー論¹⁾のなかで、その作品が東欧ユダヤ人の言語であったイディッシュ語で書かれていることに注目し、そのイディッシュ語がつねにポーランド語や英語に包囲された言語であったことを念頭に置きながら、これと比較対照可能な事例として、アルベール・カミュの『異邦人』における「小説の一言語使用」に触れたときだった。フランスの植民地支配下にあったアルジェリアを舞台にするこの小説において、アラビア語の不在（＝「排除」）は決して「無造作」なものではないというのが、そのときの結論だった。

同じころから、南北アメリカの日本人移住地まで含めた「〈外地〉の日本語文学」に関心を持つようになった私は、このカテゴリーを定義づけるのに「日本語使用者が非日本語との不断の接触・隣接関係を生きるなかから成立した文学のこと」²⁾という表現を用いた。つまり、「〈外地〉の日本語文学」は、日本語で書かれはしても、そこから「非日本語」は決して「無造作」に排除されることはないことを確認したのである。そこでは『異邦人』におけるように「異言語」は確信犯的に排除されるか、逆に、ローカル色を出すために意図的に作品中に挿入されるか、どちらかだった。ただ、私が考えたのは、多言語空間をありのままに描き出そうとして、字幕の力を借りつつ制作されうる映画ならいざ知らず、少なくとも小説は、ドミナントな言語の位置を崩さない、崩せないということ、要するに、複数言語使用地域を舞台にした小説のほとんどすべてが「小説の一言語使用」という原則にだけは忠実に書かれてきたということだった。同じころ、私はジョーゼフ・コンラッドの植民地小説なども取り上げながら、「小説の一言語使用」の原理原則のなかで、複数言語使用空間の再現がどのような形でなされてきたかを考え続けていた³⁾が、以下の論考は、そうした関心の延長線上で、植民地朝鮮、および戦後日本の朝鮮人社会を背景にした文学作品を素材としながら、さらに考究を推し進めたものである。

植民地支配は、なにがしかの形でのバイリンガル化を、植民者・被植民者の双方に強いることになったのだが、そのバイリンガル化は、けっして対称的なものではない。その非対称性と小説の一言語使用とがどのような形で交錯するのかを具体的にとらえようとしたものとして、以下の論考を読んでいただければ幸いである。

1. 中西伊之助と外地日本語文学の実験——内地人のバイリンガル化

中西伊之助の『楮土に芽ぐむもの』(1922)は、植民地朝鮮を舞台にした本格的な日本語小説として最も早い時期のものである⁴⁾。「日韓併合」直後に日本から渡った正義感に燃えるジャーナリスト(=横島)と、総督府による二束三文での土地の買収(=収奪)に抵抗した拳句、殺人を犯して死刑判決を食らう朝鮮人農民(=金基鎬)を、二人の主要人物に据えた野心的な植民地小説なのだが、当時の朝鮮の言語事情を考えると、そこでの会話はおのずと日本語と朝鮮語に色分けされる。朝鮮人のなかには、日本語のおぼつかない朝鮮人と朝鮮語に疎い内地人とのあいだをとりもつ通訳ほか、内地人顔負けの日本語を話す人物なども登場するが、1910年代ということもあって、日本語のできる朝鮮人はさほど多くない。また、朝鮮に渡ってきた内地人についても、通訳が務められるほどの人材はまだ少数で、残りの内地人は少しずつ朝鮮語に親しみをいだき始めていたものの、多くの場合、しょせんは片こと止まりであった。そういった、ともにまだまだ心もとない二種類のバイリンガルがニアミスをくり返す状況を踏まえながら、中西は彼なりの植民地観をもって日本語と朝鮮語の並立・同居する空間を描くことに工夫を凝らした。

中西は、まず朝鮮在住内地人の日本語を標準日本語から方言まで、そのバラエティに富んださまを丹念に描き分けている。

たとえば、以下の引用は、それぞれ、江戸弁①、京都弁②、博多弁③と特定できる。

① 『あゝお氣に召したとも、妬けるだらう。お氣の毒だがお前達の仲間ぢや、さかさになつても、あんな上玉は目つからんからな』(中西伊之助『楮土に芽ぐむもの』改造社、1922, p. 79。以下、同作品からの引用は同書から。なお、原文は総ルビとなっているが、必要最小限にとどめた。)

② 『旦那はん、あの方、よほどすか?』〔中略〕
『さうだよ。……だからお前、親切にしておやりよ』
『ほんまどすか、ほんなら、^{あて}私いや、臭いさかい……』(p. 237)

③ 『さうでせうか、でも随分濤が荒いやうですね?』〔中略〕
『なあに、あんた、こゝでこのくらゐなら、静かなもんくさ、わたくしや、もう二三度往復しましたけん、ようわかつとりますばい』(p. 101)

それこそ小説は日本語の方言見本市の体を示している。逆に、朝鮮語に関しては、舞台が平壤を中心とする平安南道に限定されていることもあり、その方言色をあらわすために、日本語の田舎言葉(東北弁や薩摩弁などのちゃんぽん)に置き換えるという方法が用いられている。

『林秉善、ゐるだか?』〔中略〕

『だれだあ?』〔中略〕

『林秉善、ゐただか?』〔中略〕

『えらあ、今日は寒いだあ。』（p. 7）

『お前^めえさん、ちよつくら、おたづねしますだ。このお役所は、H 政庁だつべいかあ？』〔中略〕

『あゝ、さうだよ！ お前さんも喚び出されて來なすつたかい？』

『はあ、さうですがすだ、來ましただあよ……』（p. 39）

『早く捺さんか、何を考へている？』〔中略〕

『わしのあの土地は、……どう云はつしやつてもはあ、賣れましねえだあ』（p. 46）

『ねえ……^{きん きかう}金基鏝でござす。先生さあ、夜分に上がりまして、まことにはあ濟みましねだ』（p. 67）

要するに、朝鮮人の朝鮮語使用が、見た目には、まるで日本語の方言使用であるかのような体裁に整えられているのである。これは後の「朝鮮語方言化論」の先取りとも言えるかもしれない。

他方、内地人がおそろおそろ用いる朝鮮語や、初心者でも聴きとれるような朝鮮語については、例外的に異なる処理が施され、これは朝鮮語をあくまでも外国語として取り扱う、まったく異なる表記法だと言ってよいだろう。

ごく初歩的な朝鮮語（「あいご」、「ねえ、ねえ」〔=ええ、ええの意〕など）は、説明もなくそのまま「ひらがな書き」され、少しややこしくなると、「^{はな}一……^{つご}二……^{そい}三……」（p. 140）というふう「るび」が施される。そして、内地人も会話に加わった朝鮮語の使用、内地人がその場に立ち会って、その内容に耳を澄ませる状況での朝鮮語に関しても、「ルビ」を最大限に活用しながら朝鮮語の音が再現されていくのである。

『^{おで}どこへ行くのです？……』〔中略〕こんな簡単な会話ぐらいは解つていた。（p. 147）

『^{いごし}これは、^{むすんはすめか}何をするのかい？』

彼は危ない片ことで訊いてみた。（p. 148）

そこは温突（おんどる）一間しかない土人の家であった。〔中略〕浅井はそのそと家の中へ這入って行った。

『^{よば}よば、^{むり}水、^{ちうしよ}お呉れ……^{ぼぶ}飯、^{もこつそ}食ふのだ……』（p. 314）

さすがに、日本語と朝鮮語が交錯するような会話については、「土語やら N 語やらをごちや混ぜにして」（p. 274）と説明を加えるだけで、さりとて済ませているが、少なくとも内地人が介在する場面での朝鮮語の再現には、じつに懇切丁寧な処理が施されているのが特徴である。

ともあれ、こうして、『緒土に芽ぐむもの』という日本語小説においては、「ルビ」という裏技があってこそ可能な、現実のバイリンガル状況と「小説の一言語使用」のあいだの橋渡しがかなりの精度で実現している。その結果、朝鮮語が無造作に日本語に置き換えられている箇所、

朝鮮人が田舎くさい日本語を話しているかのような錯覚に読者が陥ることさえなければ、現実のバイリンガル状況は見失われないですむはずである。

そして、その後、湯浅克衛であれ中島敦であれ、また張赫宙であれ金史良であれ、バイリンガル朝鮮を背景にした日帝時代の日本語作家たちは、おおむね中西の敷いたレールの上で「小説の一言語使用」という体裁を崩さず、植民地色の強い作品を完成させることになる。この意味で、1922年の中西は先駆的であったとも言えるが、言葉を換えれば、日本語小説に可能なことをここでほとんどやりつくしてしまったのが中西伊之助だった。したがって、これは一個の「規範」を示したというべきだろう。

それでは、こうした「小説の一言語使用」の実現に向けた工夫を通じて、『楮土にめぐむもの』の中西は、どのようなドラマを構築したのか？

それはひとことで言えば、朝鮮語習得中の内地人が、おずおずと生身の朝鮮人になじり寄るというドラマである。正義感の強いジャーナリストであったばかりに獄中生活を強いられた楢島は、そこで「二八號」の名で呼ばれる金基鎬と接近し、ほんの何回かではあったが、片ことの朝鮮語で言葉を交わし合う。

『令監、^{よんがみ}有難^{こうまうすめだ}ふ……』と云つた。
 『^{あつぱ}痛い？』と楢島は訊いてみた。
 『^{えー}然矣、^{あつぱよ}痛いよ』と、「二八號」は答へた。(p. 493)

中西を論じた渡辺直紀は、「同じ物語のなかで、同一人物の性格が異なった表記法で記述され」、それが「この作品の表現上の矛盾、話法上の齟齬」を招来していると言う⁵⁾。要するに、金基鎬の朝鮮語使用の描き方に一貫性がなく、そこではダブルスタンダードが設けられているというのである。しかし、ここは、このダブルスタンダードの行使こそが、まさに小説の本質だというふうには言えないだろうか。中西は、この小説のなかで金基鎬の悲しい最期を描いたともいえるが、まさに彼が一種の美談として描こうとしたのは、獄中ですれ違った「二八号」の姿に心を寄り添わせ、その死を悼み、それどころかその死にみずからの死を重ね合わせようとする妄想的な自己同一化の物語だった⁶⁾。もしも、この作品のなかで、「小説の一言語使用」の仕組みが「齟齬」や綻びを見せることがあったとしても、それはまさにその破綻をこそ、この小説がドラマとして描こうとしたからなのだ。楢島の口から「아과？」のひとことがこぼれ出て、金基鎬がこれに「아과여」と応答する瞬間にこそ、この小説の山場が置かれているのである。それは、ただの「痛い？」であってはならなかった。

反対に、『楮土に芽ぐむもの』は、内地日本人のバイリンガル化に比べ、現地朝鮮人のバイリンガル化に対してはきわめて冷淡な小説である。通訳は通訳でしかないし（通訳については民族的素性すら明示されない）、「ぢや君はC人かい？」(p. 291)と不審がられる日本語の達者な朝鮮人にしろ、「なぜ転がつて凝つとしとる！ 起きろ、この野郎！」と「巧みなN語」(p. 492)で囚人を怒鳴りつける看守にしろ、彼らはあたかも作者が期待する朝鮮人像からかけ離れた存在であるかのような描かれ方に終わっているのである。要するに、数多い朝鮮人のなかで、金基鎬にだけスポットライトが当たる構成になっているのだ。

2. 中西伊之助と外地日本語文学の実験——朝鮮人のバイリンガル化

しかし、中西はこのあと少しずつ作風や作品の主題を変えていく。『楮土に芽ぐむもの』にひきつづき、1922年の秋に発表された「不逞鮮人」は、多少の朝鮮語能力なら持ち合わせているものの、よりによって、日本人に敵意を抱いているに違いない「排日鮮人團の首魁」（『改造』1922年9月特大号「小説」篇、p.7。以下、同作品からの引用は同誌から）とされる男を前にして朝鮮語で対峙できるほどは自信のない内地人の青年、碓井榮策が、通訳（＝朝鮮人）と同伴で、山間の朝鮮人集落を訪ねていくという筋書である。

ところが、そこで主人公は予想外の歓迎を受け、かえって恐縮させられることになる。それこそ、文字通りの恐縮である。何より日本語など撥ねつけるに違いないと思われていた「排日鮮人團の首魁」と目される人物は、「私、洪には長く會ひませんが、と^{して}てゐます。やつぱりぶらぶらしてゐますか？」(p.21)と、朝鮮訛りは消せないものの、澁みない日本語で気さくに話しかけてくるのである。しかも、それが日本語による語りであればあっただけ、その話は有無を言わせない内容で、三・一独立運動に関わって命を落としたという娘の遺品を持ち出された主人公は、ただ居住まいを正し、恐れ入るしかなかった。「不逞鮮人」の中西は、『楮土に芽ぐむもの』では背景に追いやられていた観のある「朝鮮人のバイリンガル化」という問題に、正面から向き合うことになる。そして、それはまさに、内地人にとって、何が恐怖であるかを示すための方法だった。そして、その恐怖は、植民地支配に加担した「自分達民族の負ふべき罪」(p.52)に自覚的な内地日本人の、疾しさとないまぜになった恐怖心なのである。

内地人がバイリンガル化する遅々とした歩みとは裏腹に、朝鮮人のバイリンガル化は、「日韓併合」後、十年ほどのあいだにも、恐ろしい速度で進行していた。「不逞鮮人」の主人公とて、小耳にはさんだ「さ^{クルチ}うぢや、そ^{チョンマリヨ}の通りぢや」(p.41)程度の朝鮮語なら、難なく理解できた。しかし、朝鮮人としての意地を示そうとする相手の熱弁を朝鮮語で受けとめるほどの能力は彼にない。それどころか、朝鮮人の男は、そうした相手の不甲斐なさを見透かすかのように、言葉を選びぬいた日本語で主人公を圧倒し、うちのめし、最後には疾しさばかりか、恐怖心をまで彼に抱かせるのだ。

そして、「不逞鮮人」において主題化された「朝鮮人のバイリンガル化」は、その翌年に刊行された『汝等の背後より』のなかで、いっそう錯綜したドラマ化を施されることになる。

すでに見たように、中西の朝鮮物に顕著なのは、内地人の耳が介在しない場所では、朝鮮語がそのまま日本語に置き換えられてしまうという特徴であった。それが、さしあたっては中西の「小説の一言語使用」の基本だった。これに倣って、『汝等の背後より』は、朝鮮語の会話をそのまま日本語に置き換える場面から始まる。それこそ「まるで朝鮮語で書かれた文学作品が日本語に翻訳されているかのような」⁷⁾書きだした。

三人の朝鮮人が、国境守備隊の隙をついて、国境の〇江（＝鴨緑江）を渡り、朝鮮北部に侵入して、巡査から発見されるが、その巡査を射殺して逃亡。その後、国境警備隊は、巡査殺害の容疑で、別の三人組の朝鮮人を拘束し、その場面では通訳を通じたやりとりが交わされるが、ほんとうの密入国者三人は、カトリック教会に身をひそめる。この導入部で、日本語と朝鮮語の役割分担に「齟齬」はない。

ところが、小説の核をなすプロットは、じつはそれぞれ日本語に堪能な二人の朝鮮人男女の秘められた恋であった。

教会で小使をしている若者は、金成俊と言って、もとはといえば『楮土に芽ぐむもの』で絞首台に立たされた金基鎬の息子で、道楽の末に、家を飛び出し、父が殺人を犯し、拳句の果てに絞首刑に処されたことも知らないまま、自分もまた刑務所暮らしをくぐり抜けたという親不孝者だった。それが教会に来て悔悛し、小使としてはたらいっていたが、彼は七年間の刑務所時代に日本語をかなり身につけていた。とある盛り場で、「N語」でつつかかってきた男を相手に、猛然と「N語」でやり返したほどだ。

そして、次は、そのむしゃくしゃを引きずりながらほつき歩いているうちに、娼婦に袖を引かれそうになる場面である。

『五圓、^{チウシヨウ}お呉れ』(中略)

『五圓?』

彼は跳びあがるほど愕いた。(中略)彼の懐には一圓内外の金しかなかつたのだ。

『^{オフソ}無い! ^{オフソ}無い!』

矢庭に彼は怒鳴つた。

『^{オフソ}無い!』

女の眼色が変わつた。

『^{オフソ}無い!』

と彼も負けずに叫んだ。

『^カ行つちあへ!』

いきなり立ちあがつた女は、そのしゃぼてんのやうな両掌で、ぐみと彼の胸を押した。彼は不意を喰つて床の上に尻餅をついた。〔中略〕

『なんだこん畜生!』(『汝等の背後より』改造社、1923、p. 155-156。以下、同作品からの引用は同書から。)

ここで、中西は、突然のように朝鮮語をルビ付きで表示している。すでに彼自身が試みたことのある、内地人が何らかの形で場面にコミットする場面で用いるズームアップの手法だが、ここでは朝鮮語を強調するためではなく、朝鮮人同士の応酬のなかで、金成俊が思わず日本語の力を借りてしまう瞬間を見きわめるためだ。それは、いわば居丈高になろうとした朝鮮人の警官や看守によく見られるパターンだった。

この金成俊が、革命成就のため、身重の身でS市(=上海)から朝鮮へと密入国というか、帰国した権朱英と恋に落ちる。

じつは、この権朱英にも波乱に富む過去があった。かつて、内地人に煮え湯を飲まされた父親から「お前はこれから法律を勉強しなさい」(p. 202)と、反骨精神を植えつけられ、だったら「男より強い女になつたらいいんでせう?」(p. 205)と、気丈に受けて立った彼女は、東京行きを決意する。そして、内地日本で失恋を経験し、気がついてみたら朝鮮ナショナリストと意気投合して、上海に集った朝鮮人革命家の同志とのあいだに子をもうけていたというわけだ。

内地時代をふり返った箇所、権朱英は苦もなく日本語をあやつり、その部分だけ切り取ったなら、そこは日本文学そのものの体裁になっている。

この小説に、印象に残る内地人はひとりも登場しないが、金成俊と権朱英は、ただ朝鮮人だというだけではなく、まさに日朝バイリンガルのひとりひとりとしてクローズアップされている（朱英のおなかの子どもの父親である地下運動家の趙盛植にも、日本、そして米国への留学経験があった）。

小説の後半では、権朱英が子供をかかえて新たな逃避行へと向かう。最後に、官憲から追い詰められた彼女は、表紙に「ゴシックの肉太い赤インキ」で文字の記された「謄写版刷りらしいパンフレット」を残して崖から転落する。小説はそこで幕を閉じるのだが、そこに書かれた文字こそが、他ならぬ「汝等の背後より」なのだった。

「汝等の背後より」——はたして、その「赤インキ」の文字は何語だったのだろうか。その「パンフレット」を彼女からじかに受け取ったのは、日本語は無論、ハングルですら読書書きできるとはかぎらない朝鮮人の少年であった。それでもふつうに考えれば朝鮮語だったろう。しかし、権朱英が「投壘通信」のように死の間際に手渡したものを中西伊之助なる内地人作家が、日本語読者に手渡そうとしたのだと「メタ小説」風にこの部分を読めば、それは日本語でなければならないことになる。内地留学の経験のある権朱英であれば、漢字交じりの日本語で、読者に向けて最後の不敵なメッセージを伝えようとした可能性を考慮してみる権利、そして義務が日本語で読む読者にはある。そして、この小説が朝鮮語に訳された場合（李益相訳の『汝等の背後에서』は1926年に刊行されている）の読者は、とうぜん、この言葉を朝鮮語で受け止めることになるだろう。

内地人の朝鮮語使用と、朝鮮人の日本語使用（しかも、どこまでも日本人に媚びたりしない日本語使用）——中西の朝鮮物の文学的関心は、この二点に分極化している。そして、植民地朝鮮という二言語空間を「小説の一言語使用」という形式で無理やりにもひとつらえようとするその執念は、時として、その後の張赫宙にも金史良にすら真似できぬほどのスリルとサスペンスに満ちていた。

3. 金石範の挑戦

植民地朝鮮のバイリンガル状況を最大限に再現しようという目論見のもとで、中西伊之助をはじめとする植民地作家たちが練り上げた「外地文学」の形式は、敗戦後（＝解放後）の日本語文学にも継承される。これには小林勝や後藤明生のような引揚げ作家も多少関わることはなるが、とりわけ解放前の規範にしがみつかなければならなかったのは在日朝鮮人作家だった。ここでは、金石範を対象を絞るが、戦後日本の在日朝鮮人作家のなかで、金石範は「小説の一言語使用」という制約を引き受けながら、バイリンガル化した朝鮮人たちの問題を最も正面から受け止めたひとりだと考えるからである。中西の時代にすでに加速しつつあったとはいえ、当時、「朝鮮人のバイリンガル化」はまだまだ途上にすぎなかったし、まして「内地人のバイリンガル化」に至っては、ほとんど偶然か、ほんの出来心にも等しい自発性に依存するか、どちらかだった。そういったバイリンガル化の非対称性と未熟さのなかでこそ、中西は格闘したの

だが、その後の植民地支配の浸透は、相当な時間をかけないかぎり、後戻りなどありえない数の朝鮮人バイリンガルを産み出し、その末の日本の敗戦、そして旧植民地の解放だった。

金石範のいくつかの作品は、まさに1940年代後半の朝鮮人を支配していたバイリンガリズムに正面から光をあてたものである。そこでは、かならずしも中西伊之助時代に構築された規範が、無効になるわけではない。それは基本的には温存され、踏襲されながら、しかし、新しい局面のなかで、改良を余儀なくされていくのである。

金石範は1925年、大阪の生れだが、彼にとって「母語」と呼べるものがあつたとしたら、言うまでもなく、済州島生れの母親の言葉（＝済州島の言語）がそれであつた。しかし、彼にとっての「国語」、それこそ「養父の言葉」とでも呼ぶよりほかない日本語の影響は、とりわけ彼が作家であろうとしたとき、とても払いのけられるものではなかつた。

ただ、戦後の日本で、一時は朝鮮語による小説にチャレンジしたこともある金石範にとって、最終的に『火山島』（雑誌『文藝春秋』への連載開始は、1973年、当初のタイトルは「海嘯」。全7巻の完結は1997）が書かれるまでの経緯は入り組んでいる。

金石範は、1957年から60年にかけて、「鴉の死」など、何篇かの日本語小説を『文芸首都』に発表した後、1961年には「『朝鮮新報』編集局に移」り（『金石範作品集Ⅱ』平凡社、2005、「詳細年譜」p. 608）、1964年からは朝鮮総連系（在日本朝鮮文学芸術家同盟）の文芸誌『文學藝術／문학예술』で、一年ほど「編集人」を務め、その時期に、後の『火山島』の原型とも言える小説「화산도（火山島）」の連載を始めるのである⁸⁾。

ただ、この「화산도（＝火山島）」は1967年を境に連載が途絶する。理由としては、そもそも日本の朝鮮人勢力を背景に縦書き雑誌として発足した同誌が、しだいに「共和国」からの統制圧力の強まりとともに、横書き雑誌への変更を余儀なくされて、金日成の写真や文学論を巻頭に掲げるような、ある種の御用雑誌へと変貌していったことがあるに違なく、絶望にも等しい拒否感が、金石範のなかに生じたのに相違ない。それはまさに「鴉の死」を中心にして編まれた日本語短篇集『鴉の死』の刊行をめぐる「組織」との対立とも時期を同じうしていた。しかし、少なくとも最終形の『火山島』と、『文學藝術／문학예술』に連載された「화산도（火山島）」の大きな違いは、1948年から1949年にかけての済州島における出来事を語るにあたって、そこに登場する主要人物の日常や精神のなかで日本語が果たしていた役割に光をあてるにあたっての方法論の転換があつたと思われる。そして、そのことがまさに「ほとんど朝鮮人しか出てこない小説」であるにもかかわらず、『火山島』を「朝鮮語で書かれた文学作品が日本語に翻訳されているかのような印象」を与えることのない日本語小説たらしめている、その大きな理由になっている⁹⁾。

『火山島』には、主人公が二人存在すると言つていいが、作品が肥大化していくなか、冒頭に登場する済州島生れ、日本育ちの南承之は、あくまでも第七巻の最後で自殺を図る李芳根の引き立て役にまわる。敢えて言えば、夏目漱石の『こころ』の主人公が「先生」なのか「私」なのかというような問いが、『火山島』にも同じく向けられうるのだ。そして、『火山島』全七巻を完結させてから、さらに十年近い歳月を経て書かれることになった『地底の太陽』（『すばる』連載時のタイトルは「壊滅」）において、金石範は、「先生（＝李芳根）」亡き後の「私（＝南承之）」の再出発を素描する。李芳根には妻がおらず、代わりに、その妹・有媛が南承之にとって

は『こころ』の「静」の代わりを果たすと考えてもいい。

そのときに、まず生地は異なるとしても、世代的に見て金石範自身にほぼ等しい南承之¹⁰⁾にとって、「母語」としての済州島言葉（母との会話は、基本的にそれである）と、「養父の言葉」としての日本語（それも関西弁）のあいだの溝は、溝は溝でも、その溝を抜きにして彼の言語生活をとらえることはできないくらい、決定的なものである。しかも、日本時代に年長の梁俊午^{ヤンジュノ}とともに朝鮮語で「祖国の未来」を語り合ううちに「母国語」としての朝鮮語の重要性を思い知ることになった彼は、解放後、強い意志を持って半島に渡り、まずはソウルで朝鮮語漬けの学生生活を送ることになる。その後、祖先の地である済州島に渡り、しばらくは英語教師を務めた彼は、四・三事件前夜の地下工作に関わる。日本に住む妹の茉順^{マルスン}が日本語（あるいは日本語混じり）の手紙を書き送ってきた可能性を否定はできないが、表向き日本語とは無縁な日常を生きているなか、日本語に触れる機会はソウル市内鍾路の映画館で長時間かじりついて観たフランス映画の『罪と罰』が「日本語の字幕のまま」（『火山島』全七巻、文藝春秋、1983-1997、I-47。以下、同作に関しては同版からの引用で、ローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を本文中に記す）、上映されるさまに見入る程度だ。

だが、金石範は、この南承之に二度、日本への密航を試練として課す。一度は、四・三蜂起を前にした軍資金調達の密使としての渡航、もう一度は、四・三蜂起が壊滅していくなかで、李芳根の指示するまま、日本へと送り出された敗北感につつまれた逃避行だった。そのつど、彼は朝鮮語の上達を肉親のみならず言祝がれるのだが、自分自身がどう思っているかと、小説のなかの彼はバイリンガル朝鮮人へと徐々に成長していくのだ。おそらく、こうした人物造形は、四・三事件前後の済州島を、まずは「鴉の死」でとりあげ、またその後、同じ趣向の物語を朝鮮語で試みていた時期には、なかなか浮かんできにくいものであったと思われる。

そして、一見、朝鮮語しか話さないかに見える李芳根についても、そのバイリンガル性はかなり本質的である。彼はたまたま小説のなかで日本語を用いる機会を与えられないだけなのだ。

彼は、多くの同胞（妹の有媛をも含む）を日本に送りこむことにきわめて熱心だったが、解放後の彼は済州島と本土（半島）のあいだを往復するだけで、最後は山間の洞窟でピストル自殺を遂げる。しかし、その彼にもかつては「東京のA大学」に籍を置き、また「民族主義グループの一員として大阪へやって来たとき逮捕され、府警の地下留置所に留置され」（I-167）という過去があった。李家の長男であった兄は、内地で医師になって、そのまま内地女性と結婚し、籍も移して畑中姓を名乗るに至っていたが、李芳根の場合もまた、そのニヒリスティックな思想信条は、日帝時代に、とりわけ日本語の書物を通じて身につけたものであったに違いない。彼は四・三事件で、反乱の鎮圧側にまわった元親日派の朝鮮人を心の底から憎悪するが、憎悪の根っこは、おそらく日帝時代にまで遡るものだろう。彼は日本語で本をむさぼり読みながら抗日的な思想を鍛え上げたのだ。南承之は、李芳根について、ある噂を、梁俊午の口から聞かされる。彼は、「いつか自分の蔵書を全部燃やした」らしいという噂である（I-303）。大学で東洋史を学んだという、その蔵書の多くが、いわゆる漢籍ではなく、日本語の書籍であったろうことは想像がつく（逆に、李家の応接間には父親の持ち物らしい「十冊余りの漢籍が分厚く積み上げられている」——II-306~307）。

しかし、いくら日本語の書籍を焼き尽くしたところで、からだの奥底に沁みついた過去は、

消しようがない。深酒をして便所に立ってはみたものの、「ふと反射的に尿道が詰まる」(I-367)というようなせっぱつまった身体機能の失調にしても、それは、かつて島の小学校で起こした「奉安殿小便事件」によるトラウマの残滓・残響であったはずだ。

ともかく李芳根の脳裏には、間断なく日本語が渦巻いていた。彼はいまさらバイリンガル話者として生きることはなかったかもしれない。しかし、彼は、日帝時代に培われた精神的なハイブリッドとしての自分を表面的にはおし殺しながら、解放後の済州島で残された生を生きつつあったのだ。

苦しみや悲しみばかりではなく、少年時代の生活にはよろこびや楽しさが織り混じっていたという記憶はどうしようもないのである。日常を支配し、肉体と意識の隅まで浸透したかつての“日本”。いやかつてではない、それはいまなお残っている。まるで空洞のなかの結核菌のように生きている。たとえば日本語だ。ときたまの読書などの他は使ってもせずまた機会もない日本語が、いまでも噴き出そうとするときがある。日本人に劣らぬくらいに自分のなかにある日本語がうとましい。まるで朝鮮を占領した日本そのもののようにうとましい。朝鮮人にとってそのような形でうとましい外国語は他にありはしないのだ。強姦のように刻み込まれた“日本”の刻印が、悪夢を煙のように吹き上げる。(I-383)

この述懐は、内地生れ、内地育ちの金石範の日本観・日本語観の投影だとも言えよう¹¹⁾。ただ、在日朝鮮人であれば、解放後も日本語にふれる「機会」には事欠かないのだが、李芳根の場合は、そうでなかったぶん、その「うとましき」は、なおさら鬱屈していただろう。要するに、金石範は李芳根に日本語を口にする機会を与えないだけで、彼からそうした「結核菌」を取り除いてやるわけではないのだ。ただ、垂れ流しのように日本語が流れ出してくる日本人の身体性の対極にある、同じ日本語がまさに血飛沫、あるいは膿のように「噴き出そう」とする、そんな未然の潜伏状態を生きる一朝鮮人を文学空間に焼きつける手段として、金石範は朝鮮語ではなく、日本語を用いる。南承之にとって、日本語は救いでありうるポテンシャルを秘めているが、李芳根にとっての日本語は宿痾、要するに膿疱以外のなにものでもない。

こうして、金石範は、南承之の造形にあたってはもちろんのこと、李芳根の人物造形にあたってはまた、日帝時代の遺産を強調することで、その小説が日本語で書かれなければならなかった意味を事あるごとに念押しする。そして、まさにそうした日本語を媒介させた済州島小説の完成にあたって、彼は中西伊之助以来の「小説の一言語使用」にまつわる諸規範を縦横無尽に活用し、そしてもてあそぶのだ。

4. 『火山島』における小説の一言語使用

『火山島』を完成させるにあたって金石範が用いた方法は、次のように整理できる。まず、済州島の方言をも含め、朝鮮語の発話は標準日本語に置き換える。食母のブオギシンモをはじめ、いかなる文字教養とも無縁な島民には田舎言葉を話させるが、それを除けば、妹の有媛に言い寄ってくるストーカーまがいの若い銀行家の「ソウルことば」(I-339)、あるいは北朝鮮から済州島

に流れこんできた「西北^{ソフブ}」連の「西道訛り」（Ⅱ-406）などに関して、金石範は、折にふれ、それを特記することはあっても、少なくとも日本語への置き換えにあたっては、いちいち小細工を弄さない（もし朝鮮語で同じ小説を書こうとしたならば、この問題はかなり手の焼ける問題となり、作家に大きな負担となつてのしかかっただろう）。

その結果、神戸や大阪で、肉親と再会した南承之が、朝鮮語と日本語を使い分ける場合にも、それは標準日本語と関西弁の切り替えてほとんどが片づいてしまう¹²⁾。それこそ、時おり「ヨボ（おい）、たばこあるか？」（Ⅰ-21）というように朝鮮語をカタカナで再現したり、地名の「城内^{ソンネ}」や「新作路^{シンジヤンノ}」、あるいは「解放^{ヘンバン}」「日帝時代^{イルチュェシデ}」「祭祀^{チエサ}」「姻戚^{サドン}」といった類出用語をルビ処理で補ったりする程度で、中西におけるようにこれ見よがしの異国趣味はない。また、呼びかける相手に対する関係性を示す朝鮮語である「ニム」や「トナム」などはそのままカタカナ書きして、「李芳根センセ」（Ⅰ-75）などと日本統治の残骸としか言いようのない表現を朝鮮語での発話のなかで口走ってしまう人物（＝柳達鉉^{ユウダルヒョン}）の迂闊さを対照的に浮かび上がらせるなど、茶目っ気も發揮している。

ともかく、『火山島』は基本的には解放後の済州島を舞台にする小説で、少なくとも島は日本人の出る幕ではない。新生朝鮮の南半分が大韓民国と名乗られるにいたる過程のなかで、さまざまな朝鮮人がしのぎを削る苛酷な光景が描き出されるのだが、忘れてならないのは、その朝鮮人たちとは、程度の差こそあれ、おしなべて日朝バイリンガルだったということである。

たとえば、「奉安殿小便事件」で李芳根が「退学処分」になった後、みずからも「引責辞職」したという、その「恩師の車先生^{チヤ}」（Ⅰ-337）、あるいは、元軍属でBC級戦犯として抑留された後にシンガポールから帰還したばかりで、密輸商人の韓大用^{ハンデヨン}、南承之の姻戚で武装蜂起のための資金調達のために南承之とともに日本に渡航する康蒙九^{カンモング}…… 彼らは日帝時代の教育機関であろうとなかろうと、人生のある時代に、それなりの日本語を身につけていた、たつき上げのバイリンガルたちだった。

また、ソ連軍占領下の「北」から「南」へと逃げ出してきた「西北」の面々にしても、「下端は自分の名前も書けないような手合いがほとんどだった」が、「幹部」はそうではなく、「なかには高等教育を受けた者もいた」し、彼らは「日帝時代の地主や資産家、高級官吏、高等警察などの子弟や関係者」で、だからこそ「その反共意識は徹底していた」（Ⅰ-330）という。

したがって、1910年代の朝鮮をふり返りながら書かれた『楮土に芽ぐむもの』とは違い、『火山島』に登場する朝鮮人は、たった三十年程度のタイムラグにすぎなかったとはいえ、ほんとうに筋金入りのバイリンガルぞろいなのだ。それは、酌婦を置く料亭が日本風のタタミ敷きだったり、警察署に通じる並木の「ヨシノ桜」が「日帝時代に植えられたもの」（Ⅰ-142）だったりするのと同じく、ことごとく「植民地政策の遺物」だった。

1946年、「十一月三日の光州学生事件記念日の前夜、ビラ貼りの途中で逮捕された南承之」が「竹刀で殴られ、鼻の穴から唐辛子を混ぜた水を注がれ」、「両手を縛られたまま水槽に顔を押し込められた」のも、同じく「日本の特高の拷問に倣った」（Ⅰ-63-64）流儀だった。解放後の拷問者たちは、かつての拷問者のように日本語を垂れ流すということはなかつただろう。しかし、かりに朝鮮語で「この靴を舐めろ！」と言ってみせたとして、それだって一皮むけば日本語の逐語訳だったはずだ。そして、その合間合間に、うっかり「ちくしょう」と口走ってしまう拷

問者も少なくなかったに違いない。同じ囚人でも判決の下り方がまったく異なることで、内地人と朝鮮人のあいだに完全な分断線が引かれ、そんななかでも民族を超えた囚人同士の交感の可能性をお涙頂戴的に仮構した中西伊之助の獄中描写とは違って、解放後の朝鮮においては、拷問者も受刑者も、そのほとんどがバイリンガルな朝鮮人だった。彼らは朝鮮人同士である以上、日本語を用いることには消極的・禁欲的だったはずだが、日本語が「噴き出そう」とするのは、べつに李芳根にかぎった話ではなかったのである。

城内を散歩中の李芳根は、二人のふしぎな若者に目を奪われる。

一人がぎごちない下手な朝鮮語で何かの話を受け答えしていた。ソウルにはカネのない者は住めないとか、^{チェジュド} 済州島だって同じだというような生活の話だったが、おそらく解放後日本から帰ってきた者だろう。下手ながら日本語を使わないでしゃべっているのがよかった。^{ソンネ} 城内だけで三、四万の人口のうちかなりの数が日本からの引揚者だといってよいかもしれない。(I-220)

いまにも日本語が「噴き出」してきそうな身体性を抱えているという点からすれば同じ穴の貉であったにもかかわらず、李芳根は、おそらくだからこそ朝鮮語の拙い引揚者たちをほほえましく感じるのだ。日帝時代が、朝鮮人に日本語を強要する時代であったとすれば、解放後の朝鮮は、バイリンガルな朝鮮人に日本語能力の一刻も速い圧殺を命じる反動の時代だった。かつて内地への渡航者を大量に輩出し、そのぶん、南承之も含めて引揚者の数も桁違いに多かった済州島は、まさに反転して、バイリンガル性を抑圧する環境として、きわめつけの地獄だったと言えるかもしれない。解放前夜と直後に二度、帰郷した経験のある金石範は、四・三事件そのものを目撃・経験することはなかったとしても、解放前と解放後の朝鮮における、バイリンガル性に対する抑圧の反転と、その落差については、リアルな経験を有していただろう¹³⁾。バイリンガルであることを恥じなければならぬ社会それ自体も問題だが、そういった未来を予想だにせず、ただひたすらバイリンガルを増産するシステムを敷いた植民地統治とはまさに言語的な暴力装置だった。『火山島』が強調しようとしたことの少なくともひとつは、かくして連鎖的に抑圧・隠蔽されたバイリンガリズムの実態だった。

ともあれ、『楮土に芽ぐむもの』とは違い、『火山島』では、舞台を日本に移さないかぎり、もはや日本語に出番はない。それは、むしろ朝鮮語の諸方言が衝突しあうまさに国民国家黎明期の朝鮮半島を描いた小説であるとさえ言える内容である。しかし、その大作のどこが『楮土に芽ぐむもの』と異質であるかと言えば、そこに登場する朝鮮人の大半がバイリンガリズムを「患う」存在たちであったという点である。日本に渡ってしまえば、バイリンガリズムは何かにつけ救済的な役割を演じるだろう。しかし、解放後の朝鮮で、それは一種の病、要するに植民地支配の後遺症以外のなにものでもなく、そこでの「小説の一言語使用」は、朝鮮人バイリンガルたちの皮膚の奥にひそむ「日本語」という病巣をえぐり出すための選りすぐりの仕掛けだった。もし『火山島』が朝鮮語で書かれていたとしたら、その朝鮮語は彼ら彼女らのバイリンガリズムを否認し、隠蔽する、いわゆる「国語ナショナリズム」のお先棒を担ぐだけに終わった可能性が高い。当時の朝鮮語文学にあつて、日本語はどう転んでも異国趣味の対象ではありえなかつ

たからだ。

5. 『地底の太陽』——求愛語を求めて

『地底の太陽』（集英社、2006）は、作家自身も語るように、『火山島』の「結末を引き継ぐもの」（同書、「あとがき」、p. 316）だが、そもそも『火山島』は超大作であるというだけでなく、まさに四・三蜂起前夜からその壊滅に至るまでの約一年間に照準をあてた結果、後半に至れば至るほど「まるで朝鮮語で書かれた文学作品が日本語に翻訳されているかのような印象」を強めることになった作品だ。その意味で、『地底の太陽』は、ある種の軌道修正、もしくは原点回帰の意味合いを持つ小説だとも言える。李芳根亡き後の南承之を主人公に据え、そして舞台を日本に移した以上、それは、ある意味、必然の展開であった。また朝鮮語作家になる道を中断してから、日本語版の『火山島』に着手するまでの金石範は、『1945年夏』（1974）では、日本の敗戦間際の大阪に生きる朝鮮人たちのバイリンガルな生態をリアルに描き出すなど、朝鮮人を主人公とする日本語小説の独自のスタイルを徐々に確立しつつあったのである。

南承之が、四・三蜂起の挫折を経験し、生前の李芳根から「妹は、君をよろこんで迎える」（Ⅶ-501）と獲物をちらつかせるようにして送り出され、あれよ、あれよという間に流れ着いた1949年の日本は、四・三蜂起と同じ前年の四月に勃発した「四・二四教育闘争」（＝阪神教育闘争）と、その後の民族学校存続問題で在日社会が大きく揺さぶられる時代だった。南承之のまわりでも、大阪の猪飼野で母親と二人暮らしの妹は、解放後に動き出したはずの「民族学校」が閉鎖を噂されるなか、いまだ朝鮮民族のあるべき未来を追いかけ、「民族学校で忙しく教員をしていた」（p. 52。なお、『火山島』によると、前年の春先に会った彼女は、朝鮮語を話すことはできたものの読み書きができないオモニたちにハングルを教える立場に立ち、自分は自分で「母国語」の習得に懸命で、その座机には「朝鮮の教科書よりはずっとりっぱな「朝鮮語の教科書が二、三冊置いてあった」——Ⅱ-91）。他方、大阪では朝鮮語による教育を原則とする「民族学校」の閉鎖が決定的になり、「民族学校」に通っていた子弟には、日本人と同じ学校に通いながら「民族学級」という小さな枠組みのなかで、まがりなりにも民族教育を受ける以外の道が断たれようとしているのを尻目に、隣の兵庫県では、神戸市長田区で製靴工場を経営している従兄の南承日らの努力が一定の功を奏し、「民族学校」（具体的には垂水区の朝鮮中学校）の設置に向けての道が開かれようとしていた。

もちろん、妹の茉順にしても、従兄の承日にしても、日本での生活が長く、承之を前にすると、多少は気をまわして朝鮮語で話しかけてくるものの、いつのまにか関西弁になってしまうということもたびたびだ（1948年3月に日本へ密航してきた承之の前でも、ふと「ああ、しんど」と関西弁を口走る茉順の姿があった——Ⅱ-80）。しかし、それはそれで、在日朝鮮人にとって「母国語＝ウリマル（우리말）」を次世代へと継承するという課題は決して蔑ろにはできない大きな問題だった。彼らは、解放後のいまこそバイリンガルである自分たちを大声で誇ろうとしていた。少なくとも、解放前の朝鮮人は、バイリンガルである自分たちを誇ろうにも誇りえなかった。日本語に深く依存した朝鮮人も、反日ナショナリズムを闘った愛国者も、この点では表と裏、表裏一体だった。

そうした時代状況のなかで、パルチザン活動に傷つき、疲れはてた南承之は、いつしか失っていたかに思われていた性欲の甦りを経験し、周囲からも「南家の宗孫」(p. 21)として結婚相手を見定めを迫られながら、二人の女性を並行して愛し始めている自分を発見する。ひとりは、李芳根から、彼女なら「君をよろこんで迎える」といって指名された、東京の音大に留学中の有媛で、もうひとりは前回の密航の際に、その色気に誘われ、一触即発のところまで転がっていきかけた在日朝鮮人の高幸子である。

ソウル時代に学生同士として知り合い、済州島時代には、あたかも李芳根の罠に落ちるようにして友情を深めるようになった有媛は、どうやら李芳根が自殺した当日に、自分と同じく、その自殺を連想させる悪夢を見ていたらしい。それを知った南承之は、まさに運命的なつながりを彼女のなかに感じるのだが、かといって、久しぶりに東京で再会しても、夢の話題にまではなかなか踏みこめず、面と向かって自分の「愛」＝「サラン」を言葉に乗せることができない。そもそも日帝時代に済州島の裕福な家に育ち、光州とソウルで勉強を積んだ有媛は、日本に渡る前からそこそこの日本語能力は身につけていただろう（日本に帰化して畑中姓を名乗る長兄とひそかに文通をつづけていた彼女は、この長兄宛てには日本語で手紙を書き送っていたはずである——Ⅱ-182）。だからこそ、兄二人それぞれの後押しもあり、夢に見た留学を実現できたのだし、その日本語力は、東京に住むようになってからいっそう磨きがかかっていったことだろう。しかし、承之は、彼女とは、会話も文通も、もっぱら朝鮮語で、一度も日本語でやりとりしたことはない。二人はあくまでも朝鮮人としての恋を生きていた。

ところが、神戸に住む従兄の家に入りし、従兄の経営するゴム靴工場で、少しでも労働にエネルギーを費やそうと考えた承之（その後、彼は「金春男」の名前で偽造登録証を買い取ることになる）が、ずるずる深い関係に入っていくのは高幸子（承之は彼女のことを「ヘンジャ」と呼び続けるが、彼女は通常「サチコ」を名乗り、まわりからも「幸ちゃん」と呼ばれている）の方だった。あっけらかんと関西弁で近づいてくる幸子は、有媛と違って、ソウル時代、そして済州島時代の承之のことを何も知らない。詮索しようとしめない。詮索すべきでないとは本能的に感じているのだ。ただ、承之への愛情を募らせた彼女は、かつての拷問で深く傷ついたその背中を目にしたとたん、「アイゴ！」と「朝鮮語で声を立て」、「その場に跪く」(p. 266)と、いつのまにか体を寄せてきて、「ケロイド状の肉の甲羅」(p. 267)に「唇と舌」をはわせ、濃厚な愛撫を始めたのだった。承之はそんなときにも有媛の姿を脳裡に浮かべる（「サラン、サラン、愛の流れ」）のだが、幸子は愛撫を止めようとしめない。

ヘンジャが好き？ ほんとうに？ なんで黙ってんの？ 顔に出てるやろ。うちは顔を見ても分かれへん、こらッ、口でいえ。ヘンジャは小指をそっとスンジの唇のあいだにしばらく入れてから、口を開け、と合図をして指を抜いた。さあ、いえ、好きか？ イェ、好き。うれしい、うちを好きなスンジを、うちが好き。(p. 271)

拷問すれすれの愛撫のなかで、幸子は「いえ（＝言え）、好きか？」と問い詰めた末に、承之から鸚鵡返し「イェ」(＝相槌を打つ「はい」の意)という愛情告白の言葉をもぎとるのだ。

その後、優柔不断な南承之は、幸子とのことを有媛に告げることができないまま、なおも東

京の有媛との遠隔地交際を続けるが、少なくとも『地底の太陽』の末尾では、南家が幸子を迎える方向で二人の縁談は着々と進行し、なにより幸子は承之の子を身ごもっている。小説の常で、その後の顛末については、もっぱら読者の想像に任されているが、少なくともはっきりと言えることは、バイリンガル朝鮮人の南承之は、二人の女性を両天秤にかけなければならない青春を朝鮮戦争勃発前夜の日本で生きなければならなかったということだ。そして、彼の二又に分かれた言語能力は、かりに甲乙のつけられないバランスの取れたものであったとして、彼はいまだ朝鮮語では求愛の言葉を口にできず、日本語ではあられもなくそれを吐いてしまったということだ。有媛を選ぶか、幸子を選ぶかは、朝鮮語で求愛するか、子育てをするか、あるいは、日本語で求愛するか、子育てをするかという選択とも連動していた。

もちろん、ともに家庭を設ける相手が有媛になろうが、幸子になろうが、どう子どもを育てるか、どのような学校で子どもに教育を授けようかという問いは、次から次へと在日朝鮮人の家庭には持ち上がってくるだろう。しかし、『地底の太陽』をかりに青春小説の名で呼ぶとして、そこでは女性の選択という問題が言語選択という問題と不可分な選択肢として示されている。

あるいは、こうも言える。少なくとも、在日朝鮮人のほとんどがバイリンガルであった時代、その「母語」は朝鮮語であり、「母国語」もまた朝鮮語であっただろう。しかし「養父の言語」としての日本語の感化力は圧倒的で、民族学校の必要性、最低でも民族学級の必要性が熱心に説かれたのは、その逆風の中で「母国語」を立ち枯れにさせてはならないという、あくまでも対抗的な民族愛のあかしだった。ただ、かりにそうだとしても、在日朝鮮人は、求愛の言語にまで縛りをかけることはできなかった。

6. 『地底の太陽』——国境のない夢

金石範は、彼がおよそ七年ぶりに日本語で書いた『虚夢譚』（1969）以降、頻繁に主人公たちに夢を見させるようになる。『火山島』や『地底の太陽』においても、その特徴は明らかである¹⁴⁾。夢と言っても、それこそ「淫夢」だったり「悪夢」だったり、中身はさまざまなのだが、何よりも金石範自身が、みずから目撃することのなかった四・三事件当時の濟州島を小説の舞台とするにあたって、まさに玄界灘を挟む対岸で、郷里に思いを馳せ、それこそ日夜、悪夢に悩まされながら生きた日本での日々を踏まえつつ、まさにそうした「悪夢」に肉づけを施すようにして『火山島』を書きつづけたに違いないのである。そして、これこそが文学一般に目を転じてみせたとき、「亡命者」に共通する特徴だと言えるだろう。たとえば、ポーランド生れではあったが「ホロコースト」期を北米ニューヨークで生き延びたアイザック・バシェヴィス・シンガー¹⁵⁾。あるいは、第二次世界大戦におけるドイツ軍による占領、同じ戦争の末期から戦後にかけてのソ連軍による事実上の占領、こうして相次いだ占領時代を、南米プエノスアイレスから眺めやることになったヴィトルド・ゴンブローヴィッチ¹⁶⁾。彼らの作品群を「亡命文学」とひとくくりにできるなら、「夢」を介して架空の帰郷に言葉を与える金石範の作品群もまた、確実に「亡命文学」の特徴を備えていると言える。日本に身を置く南承之が「自分がいま、同時に日本と濟州島の両方に存在しているような奇妙な感覚に落ちる」（Ⅱ-92）と感じるとき、それはまさに「亡命者」としての金石範の日常の投影だと考えるべきだろう。ただ、シンガーやゴンブローヴィッ

チがあくまでも郷里の言語（イディッシュ語やポーランド語）で書きつづけたのに対し、金石範は単なる「亡命者」ではなく、宗主国に生まれついた「植民地出身の二世」であったが故だろう、むしろ日本語文学の伝統になぐりこみをかけるような「もうひとつの亡命文学」「もうひとつの日本語文学」の形を模索することになった（こうした日本文学に対抗しようとする日本語文学の形は、旧英領や旧フランス領植民地出身の「亡命作家」たちの文学との共通性が強いと言えるだろう¹⁷⁾）。

そして、それが金石範にとっては、日本文学に根深い「私小説」の伝統からの脱却の手段だった¹⁸⁾。夢のなかに登場する「私」がいたとして、それは「私」の分身ではあっても、もはや生身の「私」ではない。彼は、「夢」を介することで「私」を分身化させ、増殖させていだけなのだ。それが彼の「文学」だった。日本の「私小説」は「夢みる私」を書くことはあっても、「夢見られる私」に肉づけを与えることにはあまり熱心ではなかったと言すべきかもしれない。

そして、そこで重要なのは、「亡命者」の「夢」には「国境」がないどころか、「国語」すらないということである。金石範は作中に描かれる夢のなかで、登場人物が何語を話すかまで明示的に語ろうとはしないが、それは「夢」がしよせんそういうものであって、それこそ、覚醒後になされる、その意味内容の再解釈としてしか夢の記憶など存在しないものだからなのだ。前に名を挙げた『虚無譚』は、日本に住む在日朝鮮人の主人公が「やどかり」にはらわたを蝕まれる夢を見る話だが、そこで主人公の「私」は「やどかりの朝鮮名を調べなければならぬと考えた。そして虚妄な夢だと思ったが、いやそのように思い、そのはらわたといっしょに心をえぐり取る思いのその夢を否定したかったが、少なくとも朝鮮語で構成されていたそのことだけは崩したくなかった」（『金石範作品集 I』平凡社、2005、p. 155）と、理不尽なまでに夢が何語であったかに拘泥する。バイリンガルな人間の夢のなんであるかに対する金石範の問いは、このあたりに根を下ろしていると考えてよいだろう。そして、『地底の太陽』においても、南承之の夢は、かぎりなくバイリンガルのなのである。

濟州島の糞尿でじゅくじゅくのわら床の石垣のある豚小屋ではなく、床はコンクリートのようだった。有媛は音楽の勉強をしながら養豚をやっているんだなあ。離れたところで、後ろ向きの等身大の黒い影がそれを見ていたが、有媛は気がつかないのか、無視しているのか、見向きもしない。豚の一头が後ろ向きの等身大の影を見返していた。トゥエジ、トゥエジ……。豚、豚……。(p. 46)

夢は言語活動だ、とフロイトならば言うだろうが、かといって、それが特定の言語によって限定されなければならないものかと言えば、おそらくそうではない。特に多言語使用者の場合には、そう考えざるをえない（同じことは、シンガーやゴンブローヴィッチが大西洋の彼方で故郷ポーランドを思い描いた際にも十分に起こりえたことだ）。

もちろん、かといって、金石範は、現実世界における登場人物の発話言語に関してもまた無造作かという、そうではない。その登場人物たちは、度合いに差こそあれ、そろいもそろってバイリンガルだが、彼らは発話のたびに、そのつど言語を選択（コード・スイッチ）しなければならない生き物なのだ。

「スンジ、おまえ、二階で昼寝をしておっただろ」従兄が朝鮮語でいった。「二階の部屋に用があって行ったら、階段の横の部屋で、何か、うん、うん、うなされるみたいに、トゥエジ、トゥエジ……。うわ言みたいになっておった。〔中略〕

「えッ？ トゥエジ？〔中略〕そんなことを私がいったんですか？ 何か、夢を見てたんだ」「豚の夢か？」

「イェー、たしかに、そうです」

「済州島の夢か。夢に出てきたのは黒豚……。？」

従兄は、はっはあと笑いながら、取立て、チェジュドの名を口に出して乗せた感じだった。

「忘れていたけど、黒豚ではなかったな」

「スンジは豚の夢を見たんか。朝鮮では豚の夢を見たら、ウンス（縁起）がええというんやで。何かええことがあるかもしれんわ」

鏡子は酔いのにじんだ太い声で笑った。(p. 49)

承之と承日の二人は、特別な話題でないかぎり関西弁で済ませることが多かったのだが、ここではめずらしく朝鮮語でのやりとりが続いたあと、その「トゥエジ」喋りの話題を小耳に挟んだ承日の妻の鏡子キョンジヤが、いきなり関西弁へと言語をスイッチさせる。承之は、神戸の従兄宅の二階で、東京留学中の有媛とトゥエジの出てくる夢を見る。しかし、夢に出てきたトゥエジは済州島名産の「黒豚」ではなかったらしい。それが夢というものだ。

そして、思考のなかでも、これと同じことが生じるのである。『火山島』も『地底の太陽』も作品としては日本語で書かれている。そのなかで、だれよりも南承之は、生活のための言語として日本語と朝鮮語のいずれをも手放すことのできない存在として設定されている。そうしたときに「小説の一言語使用」は、拘束でしかないかもしれない。しかし、だからといって、『火山島』や『地底の太陽』が二言語併用小説として書かれたとしても、そんなことで拘束が解かれることはないだろう。おそらく日朝バイリンガルの南承之は、日本語「か」朝鮮語で物を考えるのではなく、多くの場合、日本語「と」朝鮮語で、並行して、あるいは「混ぜこぜ」に、物考えるのであり、ただ発話に際して、その場の空気を読みながら、そのチャンネルを切り替えるに過ぎない。彼のなかに有媛と幸子がともに異性としてかけがえのない存在であり続けるというのもある意味で同じことだ。

有媛と承之のあいだを取り持とうと、まるで「酵母菌」を植えつけるように「互いの交感」（『火山島』 I-311）を促そうと計らった李芳根の思惑が、かりに画に描いた餅に終わろうと、それでも、二人はそれぞれがバイリンガルなりに日本の地で生き延びていこう。少なくとも当面は。その後の彼らの「母国語」との関わり方は、まさに運命の紆余曲折にゆだねられることになる。

最後に

在日朝鮮人の文学は、金鶴泳や李恢成の世代を経て、李良枝や柳美里の世代へと引き継がれてきた。そのなかで、ある者は日本語と朝鮮語の境界に苦しみ、ある者はそこであっけらかんと戯れながら、結果として「小説の一言語使用」をそれぞれに生き延びさせてきたと言えるだ

ろう。モノリンガルではない日本語話者がさまざまなルーツを背負いながら日本語文学に続々参入してくるようになった現代、おそらく「書記日本語」という装置は、とりわけ、「小説の一言語使用」という拘束を緩和する狡知に富んだ精巧さを誇りうるそれであると言えるのかもしれない。中西伊之助や金石範の悪戦苦闘は、確実に日本語文学の守備範囲を大きく切り拓く力となりえているのである。そして、これからもそうだろう。

そして、ここで考えたことを通して、もうひとつ言えることは、戦前まで遡った「外地の日本語文学」をめぐる議論から、現代に特徴的な日本語を「母語」としない日本語作家の活躍や貢献の問題まで、従来の議論は、作家自体の複数言語使用（そうしたなかでの最終的な日本語の「選択」）をめぐる問題に偏ってきたということである。しかし、ここで私が提起したいのは、選りすぐりの多言語使用者である日本語作家が、文学の中に救（掬）い上げようとしたもののひとつが、名もない「バイリンガル」たちに名前を与え、その日常生活のなかでの複数言語使用を物語の一部としてフィクショナルに再現する、そういう作業だったということだ。世界から複数言語使用という状況が消えないかぎり、複数言語使用作家には何らかの「使命」が課されている。

注

- 1) 「ユダヤ文学の語りの戦略」(『エクストラテリトリアル／移動文学論Ⅱ』作品社, 2008) を参照のこと。
- 2) 『(外地)の日本語文学』神谷忠孝・木村一信(編), 世界思想社, 2007, p. 31。
- 3) 前掲『エクストラテリトリアル／移動文学論Ⅱ』所収の「コンラッドと英語, コンラッドとポーランド語」を参照のこと。
- 4) 『(外地)の日本語文学選③朝鮮』(黒川創編, 新宿書房, 1996) や『韓流百年の日本語文学』に補遺として掲載されている「年譜」を見るかぎり、先立つ事例としては高浜虚子の「朝鮮」ぐらいしか挙がっていない。
- 5) 渡辺直紀「中西伊之助の朝鮮関連の小説について」, 『日本學』第22輯, 東國大校日本學研究所, 2003. 12, p. 256。
- 6) 「横島はそれをふと見ると、一種の凄愴さが犇と彼に薄ってきた。そして、咄嗟に(二八号じゃないか?)と彼は思った。すると彼は、何者かに自分の心臓をざくりと刺されたような気がした。」(p. 330)
- 7) 渡辺, 前掲論文, p. 249。
- 8) 『文学芸術／문학예술』(在日本朝鮮文学芸術家中央委員会の「編集人」として名前が挙がっているのは同誌13号(1965年5月)から同誌16号(1965年11月)まで。また「화산도(火山島)」の連載は、13号(1965年5月)から同誌23号(1967年6月)までである。
- 9) ちなみに、アルジェリア独立戦争をフランス語で描いたマムリの『阿片と鞭』*L'Opium et le bâton* (1965) や、アンゴラ独立戦争をポルトガル語で描いたベベテラの『マヨンベ』*Mayombe* (1980) などとの比較可能性をさぐるのも興味深い。
- 10) 作家自身が「私の分身ですね」と語っている——『金石範《火山島》小説世界を語る!』右文書院, 2010, p. 151。
- 11) 「日本語は国土とともに国語を奪われた朝鮮の幼児の柔らかい脳髄を強姦した」——『新編・在日の思想』講談社文芸文庫, 2001, p. 132。
- 12) 梁石日の『血と骨』もコードスイッチングの描き方は同じ。以下の引用を参照のこと。Aは前半が日本語の大阪弁で、後半が朝鮮語。Bには言語に関する指示がないが、会話文は朝鮮語のはずである。

A) 職人たちは、今度は八人がかりで金俊平を制止し、一人が田辺職長を抱きかかえて社長宅に逃げ込んだ。

「金さん、落ち着いとくなはれ」

金俊平の片脚にしがみついている根本が冷静になるように呼びかけた。

「警察沙汰になるのはまずい。警察は朝鮮人を信用しない。あんたが豚箱 に放り込まれる」

同じ濟州島出身の高信義が朝鮮語で言った。日本に在住している朝鮮人にとって、特にこういう状況での朝鮮語は妙に効果があった。同胞の連帯感に訴えかけるものがある。高信義の朝鮮語のひとつで、激昂して張りつめていた金俊平の表情がゆるみ、全身にみなぎっていた力がしだいにぬけていった。(幻冬舎, 1998, p.13)

B) 一人の老女が「アイゴー、俊平じゃないの。わしを覚えているかい?」と言って近づいてきた。郷（くに）にいた頃、近所に住んでいた海女のシンセン婆さんだった。

「ああ、覚えてます」

と、金俊平は頷いた。(p.16)

- 13) 日本の敗戦、朝鮮の解放の日に十七歳の朝鮮人少年だった金時鐘にとって、日本敗戦＝朝鮮解放がもたらした「反転」は、青天の霹靂だった——「朝鮮文字ではアイウエオの「ア」も書けない私が、呆然自失のうちに朝鮮人へ押し返されていた」（『在日』のはざままで』平凡社ライブラリー, 2001, p. 13）。それは、右利きの人間がいきなり左手に包丁を持ってと言われるような二刀流の「反転」だったはずである。他方、朝鮮生れの作家、後藤明生は、朝鮮時代をふり返りながら小説を書くにあたって、「鞭打っていた日本人がやがて鞭打たれることになった敗戦による逆転」を「考えに入れる」ことの重要性を説き（「わたしの内なる朝鮮」、『文學界』1971年7月号, p. 19）、代表作『挟み撃ち』（1973）は、まさにこの持論を展開させながらできあがった作品だ。しかし、いかに敗戦国民であったとしても後藤から日本語が奪われたわけではない。朝鮮語の習得を強制されたわけでもない。いつしか片ことなりに身につけていた朝鮮語がいざという際に物をいうことがあったかもしれないが、「国語」としての日本語が傷つけられることはなかった。
- 14) 「私の『火山島』には夢がたくさん出てきます。〔中略〕無意識の世界というものは感知できないけれども、確実に存在する。小説なら小説が、全体を書こうとするならば、無意識の世界も書かなくてはならない」——「文学的想像力と普遍性」、『異郷の日本語』青山学院大学文学部日本文学科編、社会評論社、2009, p.25-28。
- 15) 1944年から執筆再開、終生、東欧ユダヤ人の言語で書き続けた。ホロコースト被害者やサバイバーを描いた作品が多数あり、たとえば『敵・愛の物語』די געשייטע פון א ליבע שונאים- (初出、1966) には、戦後早い時期に米国に逃げ延びたホロコースト・サバイバーが、遅れてやって来た同胞と再会するシーンがある。
- 16) 異郷の地にあって祖国ポーランドの崩壊を夢想する戯曲『結婚』*Ślub* や (1953) や、ドイツ軍占領期を背景にした好色文学の『ポルノグラフィア』*Pornografia* (1957) などがある。アルゼンチン時代のゴンブローヴィッチの作風については、『エクストラテリトリアル』（作品社、2008）所収の「在外ポーランド人作家にとってのポーランド」を参照されたい。
- 17) エドヴィジ・ダンチカは、ハイチ生れ、米国育ちの英語作家だが、祖父母や両親の世代が1937年にサント・ドミンゴ島で発生した虐殺事件をめぐるハイチ人の記憶を掘り起こした『骨狩りのとき』*The Farming of Bones* (1998) などの作品を残している。事件のみずからは当事者ではなかった作家が、歴史的な大災厄の小説化を試みたケースとして、金石範に通じるものがある。総じて、カリブ海地域のアフリカ系作家たちは、数百年のスケールで歴史を遡りながら、奴隷船の記憶、奴隷制社会の記憶に言葉を与えようとする。しかも彼ら彼女らは、郷里を離れたヨーロッパや北米の地にあって、その移住地の

言語で書くのである。それは旧宗主国の言葉を「酷使」することで「復讐」を果たそうとする場合もあれば、ダンチカのように、いままさに亡命ハイチ人社会の急成長を経験しつつある近隣の大国の言語を「横領」する場合もある。じっさいに、『骨狩りのとき』が描く虐殺事件は、当時のドミニカ共和国の実権を握っていたトルヒーヨ大統領の政策に則った反共・人種主義的なもので、背後に米国の存在があったことは明らかである。

- 18) 「私は済州島の事件を体験していません。もし私が、日本文学の私小説的な影響を受けておれば、たぶん『鴉の死』のような作品は出てこなかった」——前掲「文学的想像力と普遍性」p. 14。